

文 化

3月半ば、東京・上野の東京都美術館で約1カ月後に開幕予定だった「ボストン美術館展 芸術×力」が延期となり、その後中止に追い込まれた。ボストン美術館が休館し作品借用のめどが立たなくなったのだ。コロナ禍で海外の美術館の休館が長引くにつれ今年予定されていた大型展の延期や中止が相次いだ。

海外から名品を集め、マスコミと共催する大型展は、日本のミュージアム活動の核。2〜3カ月の会期で60万人超を動員するような「ブロックバスター展」は、世界の展覧会入場者数ランキングの「常連」でもあった。

過去にも東日本大震災の原発事故などで作品借用が困難になったことはある。しかし今回、世界の主要美術館が一斉に活動停止するのを目の当たりとした美術館・博物館の間で、ミュージアム本来のあり方を問い直す動きが広がることとしている。

「3密」回避 新たな体験

「大量動員至上主義は変更を迫られる」(東京国立近代美術館)。「巨額の資金を投じる大型の特別展は減少すると思われる」(国立西洋美術館)。「日本経済新聞が全国の主要美術館を対象に行ったアンケート調査にこんな回答が寄せられた。

「チケットを買うのに何時間も並び、混雑した展示室内で人の頭越しに作品を見る。それは、興行であって展覧会ではない」。都内の美術館関係者からは手厳しい声もあがる。コロナ禍は世界経済を直撃。「企業からの協賛金も減り、航空輸送費に億単位の金をかける海外展は実現困難になる」との見方もある。

そんな中、緊急事態宣言解除後に再開した主要館では「3密」を回避するため、オンラインでの日時指定予約システムの



作品とゆったり向き合う

導人が急速に進む。東京国立博物館は総合文化展(常設展)のチケット販売をネット上の予約のみに切り替えた。京都市京セラ美術館もオンラインと電話による予約制で1つの展覧会で入館30分ごとの定員を50人、観覧時間を1時間に制限。18日に国立西洋美術館で開幕する大型展「ロンドン・ナショナル・ギャラリー展」も事前予約制だ。

来場者数の制限はチケット収入の減少につながる。ネットに不慣れな来館者に配慮する声もあり、これまで美術館・博物館のチケットは窓口販売が主流だった。

しかし東京国立博物館などの予約システムを手掛けるイーティックスデータファーム(東京・渋谷)の原田栄二社長は今回の動きが「本来のアート鑑賞のあり方を見直すきっかけになる」と指摘する。ふらりと美術館・博物館を訪れることはできなくなるが、ゆったりとした環境で作品と向き合える。同社は全国の国立館を中心に現在、約50館とオンライン予約制の導入を準備中だ。アンケートでは、国内のミュージアムの連携が進み、各館の調査・研究活動に基づく展覧会が主流になるとの回答もあった。横浜美術館など公立3館が収蔵品のみで11月に開催する「トライアロウ展」はその一例。国内の収蔵品のデータベ

ーヌ化など美術館・博物館活動を強化するための地道な取り組みの重要性を指摘する館もあった。作品の収集・保存・展示にとどまらない役割を模索する館も少なくない。「今回私たちは生命とは何かといった根源的な問題を考えた。美術館

はますますこうした問いを来館者と共にじっくり考える場になる。コロナ禍の記憶の風化を防ぐ場にもなるべきだ」と横浜美術館の蔵屋美香館長。災禍がミュージアムの挑戦を加速させる。

編集委員 窪田直子、岩本文枝、赤塚佳彦が担当しました。